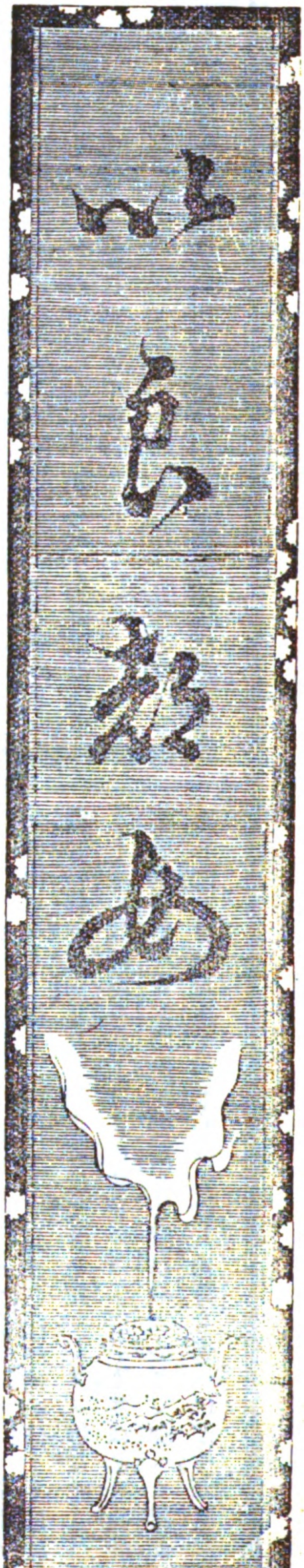

いらつめ第卅七號目次（明治二十二年十二月三十日）

●小　說……年の垣（其三方）……田中龍濯
●家　政……裁縫獨學び（高等第五）……木下貞子
袷長襦袢及び半襦袢縫ひ方
○衛生料理法（第八）……岩問芳松
上等料理＝相鴨小鴨及び鴨むしやきロース＝鳩むしやきロース＝鶉鴨むしやき＝鳥のむしやき野菜さ煮る心得
○衛生三食見立て（第四日及第五日分）……岩間芳松
●文藝美術……歲暮の文……竹屋雅子
○懸賞文藝唱歌文章
●雜　纂……饗庭篁村氏＝日本文學史に小說を省く＝國民之友の新年附錄＝喪服の色＝帽を去る禮＝ちやアれす二世の滑稽＝廢娼論＝或人の辭世＝毒朱唇＝どうでの新作
●寄　書……初春の遊び……藤のやゆかり
●答　書……陰陽曆相當表
●通信問答……二葉亭嵯峨のや二氏の本名及美妙齋紅葉二子の年齡＝天刑病筋を知る法＝婦人の名の下に子の字をつける＝牛乳について一切＝硼砂を解かす事＝硼砂で歯をみがく事＝そばかすを去る法＝腫物の痕の紫色を去る法＝脣をよくする法

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二十九錢郵稅共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵稅共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵稅共金一圓〇二錢、四十八部金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六十五錢郵稅共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵稅共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府内に限り無郵稅●毎月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）と記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り増しなればかけ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す證として雜誌の表紙に成美社の捺印を加へましたから是を目標として御求めを願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任じません。捺印の無いのを御求に爲ッても代金御支拂に及びません。

從第二十八號至第三十七號十部版權所有

新案別製本出版の社告　度々の御注文により第二十六號からいらつめ別製本を作り、永く保存に堪へるやうにしました。（一）別製本は美麗堅牢な紙に本文を印刷する事（二）別製は容易に再版をせぬ事ゆゑ御注文は至急で無ければ賣れ切れになります（三）別製並製共記事は相同じです（四）定價は前にあります（五）第二十六號第二十七號及び第二十八號の別製本は悉皆賣れ切れになりました。

いらつめ合本の社告　西洋諸國の婦人雜誌では大抵一仙か一ペンニの月三回以上發兌でそれを一ヶ月の後になり、一ヶ月分だけ合本し、表紙を付けて賣り出します。いらつめでも是に倣ひ、來る十二月が過ぐれば更に十二月分だけを合本し、美麗な表紙を付けて賣り出します。定價金十錢五厘郵稅共金十二錢、紙數八十四ページ、總目錄付き。府内無郵稅。但し本十一月に限り十月の第廿八號から十一月最後の三十三號に至るまで總六册を一部に合本して賣ります是は續稿にかゝッた記事が彼是ある爲めです是は定價十五錢五厘郵稅共十七錢五厘です。

注意

本號には時節に相應の**鴨家鴨鶉**等のむしやき料理法●**喪服**の色**牛乳**に付いての一切の事●そばかすを去る法などが出て居ます

明治二十二年十二月廿九日印刷
明治二十二年十二月三十日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地寄住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉

發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

いらつめ第三十七號

さて去る十月發兌の第二十八號から本誌に大改良を加へてからこゝに僅か二ヶ月、その間發行の部數も驚くほど増加いたしたのは實に豫想外で、全く愛讀諸孃の御かげと恭く、御禮を申し上げます。就いて前號にも一寸御披露いたしましたが、いよ〳〵いらつめも外國の婦人雜誌と直接に交換をいたす上は發送の便ごとに多少其中の箇條を略譯して雜誌と共に送る次第、さうなれば流石に日本の婦人雜誌の名譽の全體にもいくらか關係する事ゆゑ、其記事に於てもます〳〵充分に擇まなければ爲らぬ仕儀、いよ〳〵奮はなければ爲らぬ秋も來ました。　されば日本の婦人雜誌はまだ比較して文學美術の分子が一般に乏しい、それを、いらつめはいくらか免れて成るべくは豫ねての世評どほり凡そ優美の方に關してはむしろ全く洩らさず載せるやうにし、かた〳〵他の家政社交などを御助言を御婦人方にするつもりです。あらかじめ言ふ希望は是として、歳末かれ是れ世間も混雜いたす事ゆゑ、本年中に今一度入れるべき書も今はしばらく抜いて來年の初號發兌（都合により八日發兌を十日とす）に引きかためて出す心得。また其他いろ〳〵の續きものもそれから更につゞけます。　歳末にのぞみ、敬んで愛顧諸孃が御めでたく新年をむかへられるのを祈り、あはせて吾〻の望み及び處置を簡略に述べました。

明治廿二年十二月卅日　　いらつめ記者

小説

年の

田中龍涯寄稿

年の垣　其三方

右左へだての中垣

「モ…モ…申しお…お母サン……ナ…ナゼ…御情ない御最後…エ…エーお母サン……お母サン……私の不孝ゆゑ此有樣…ワ…私が、シ…死にますから、セ…ぜひ、イ……活て下さんしまう―、申し……申しア、モー、物が……ア、、ドトウシヨー、ワァッウー、」

と泣伏したは以前のお末で、此樣子で見ると、老母は今迄の氣も我も折れた所へ、惡魔が付込ンで、難なく非業の刃を與へたと見ゑます。テモ無慘……さん〴〵に花をたしなめた後の嵐…娘も今は氣も狂亂、只轉げ廻ッて居るのみで、餘りの狼狽に隣へ知らせる氣も出ませんでしたが、幸ひ裏の者が此騷動を聞き付けて來て見て仰天……俄に醫者も呼ぶ、親類も來る、一時は上へ下への混雜、土瓶が麁忽するやら、炭取が歩き出すやら、樣々の所作もして見ましたが何が偖……母は此等の騷を見向もせず、逝て仕舞ました。　アノ靜なとこへ……娘は始終面を得上げられません。手こそ下さぬとも我が爲の御最後、今迄の御恩の萬一も酬ひず、かてゝ加へて種々な心配とさせた上での悲しい首途、自分も考へれば生て居た

くはありません……ケレド、今又自分が言譯に死ンで仕舞へば、其こそ心殘りの多い事、それよりは急いで、信州の叔母の處へ遣ッてある、アノ妹を呼戻し、相談もした上で、オーツーだと、口まで出ても、又ヨヽトと泣伏して、九十九谷のそれならで、幾谷〳〵の袖の雨、絞りなやむも哀です漸々に親類の者に激されて、野邊の送の相談やら、行末の事など打案して、娘の亂るヽ雲の心の闇れ、彌に結ぼる斗りなれど、ハヤ曉の風は暗黒の魔王の殘黨、雲助ばらを薙拂ッて仕舞ました……が、其も常になく肌を嚙み、軒の枝に朝の讃美の歌も、何となく哀れを添へる樣に聞ねました……

〇　〇　〇　〇

二日經て廿九日、其も隣の喜に一と日を譲ッての苦日壁を隔てヽ哥ふた高砂の曲が、未た鼓膜の顫動も止まぬ內……哥はねばなりません……櫃を曳くの哥を……庭に燎いた共白髪の麻殼の篝火が、未た瞳孔に影も消ねぬ內……むせばねばなりません。　鳥部野の煙に……嗚呼彼は溢るヽ喜の泉……此は湛ふ憂の浪、同じ三年前に國を出て、同じ名の付く女學校の生徒で、勉强と不强勉とは恐しいもの、喜に余命を延ばす親もあれば、悲みに定命を縮るものもあり、親と云ふ親の心配は同じ事ながら、子と云ふ子の心掛一ッつで、同じ年の垣を、樂につれて安々越すもあり悲に阻てられて越し兼ねるもあり、孰れ因果とやらの沙汰で、苛酷く言ッたら自業自得かも知れませんが、十分後悔の徵候も見ねた此處女を、箇程まで嘆に沈ませるとは……實無慘な次第です……

シカシ無慘ハ未だ是斗りでなく、其夜娘は手短かな手紙……妹の行末を叔母に賴ンだ手紙に、綠の黑髪を殘して……何處ともなく出で行きました……嗚呼無情？咲花の春を迎へる中に、越跡の雪の肌に墨染の衣……よく聞けば丁度厄年……ア、厄負？

家政

裁縫獨學び（高等第五）

木下貞子

袷長襦袢及び袷半襦袢の裁縫方

袷襦袢の縫ひ方は先づ裏の丈を表の丈より四分長くなし、前下りは七八分位に、而して袖の丈は表裏をよくあふやうに揃へ、口先を縫ひ、袖巾を度りたるあと裏か裾廻を胴裏へ縫付け裏と表と一處に脊を縫ひ、但し裾廻の所より下は別々にはなし縫ひ、後の巾を度り又肩の巾を度る。夫より身の方の八ッ口をぬひ、袖は身頃と共にぬふなり。次に袖下を一枚わけてぬひ、而して脇縫をし、裾口は一度にぬはず衽のどのくらゐでたるかを見て裾を合せ躾糸をもなし、横綴をすまし、布綴をするのです。

又次はまへ端を表と裏に一度にとぢ、前の巾を度り衿を付け巾の寸法をきめ、衿先きをぬひ次には衿を絎付け終りし後半衿を左の方へ一寸許り長く懸るのです。

袷の半襦袢の縫ひ方と示す

半襦袢の縫ひ方は前に、略ぼ同じやうですけれどちがつた處を書きます。　先づ第一に裏と表との袖口を合せ、巾のちがはぬやうに度り、裏表の裾口を合せぬひ、次に馬乘りを度り

袖巾を度り又後巾肩巾を度り脊筋を縫、袖は身頃と一處に四つ縫にするのです。　但し裏袖は前の方を少し五寸許りも縫はずにのこし、袖の下の方をぬひ、引返しにして絎付るのです。　夫れから馬乘や脇をぬひ前巾を度り襟を付るのです。世間で一ッ身三ッ身四ッ身といふ故は一ッ身は身頃巾一幅のゆゑにいひます。　三ッ身も同じく身頃の布を三つに折りなして裁つ故に三ッ身といひます。四つ身　身頃の布巾を四つ折となし、其の布地の端から衿衽を欠き落す故に四つ身といふのです。

改良實用衛生料理法(其八)

上等料理の部（卅六號つゝき）

元鹿鳴館料理方岩間芳松

廿六　家鴨及び鴨小鴨蒸燒ロース。　鷄と同しく、殘れる毛を燒き、首の脊へ立に庖丁を入れ、脊際から頭まできり、首の皮を胸まで下げ、脊際から首骨を切落して中指を入れ、又肛門を丸く切拔き、臟腑を出し、鷄同樣に燒くのです。

廿七　雉子蒸燒ロース。　此鳥も鷄と、同し樣に仕立てよし、鳥に詰物の法數々あれども、今初心に解り易く手早き法を示さば、丸葱少々細小に割み、鳥の膽も同しく切り、鹽胡椒少し加へ、鍋に牛酪又は脂肪を解し、葱と膽を煎り、鍋と火外に置きて麵包の中の柔かき所を取り、水に漬して後絞り上げ、鍋に入れて玉子を交せ合せ、鳥の肛門の所から詰め込みて燒き、又詰物を出して鳥と付合せ、燒肉汁掛、出すのです詰物をして燒く時は肛門の孔へ尻尾と折り込み、糸にて通し結びて燒くのです。

廿七　鳩蒸燒ロース。　此の鳥も鷄同樣に仕立、全形又は立に貳つ切にし、皿に盛ッて出すのです。　詰物ない蒸燒には水菜(西洋八百屋にあり洋名クレツン)を付合せにするのです。

廿八　鶉鴫蒸燒　羽を取り毛を燒くこと前の通りです。鴫は腸を去らず全形にて燒くのです、中途にて麵包を二分の厚さ、形ち鴫の大きさに切り、鴫の油を兩面に付け、同し鍋の中で程よく燒き、鴫の下にしき皿に入れるのです。

廿九　牛、羊、犢、豚、猪子、鹿肉の類をロース燒になす事。　牛、羊、犢、豚、猪子、鹿等とロース燒になすには脊の肉と(一名外ロース)よろしと爲ます、肉の上に掛かりたる筋を庖丁のさきで切り取り、金の皿に入れて上から脂肪を掛け、鹽胡椒を振り、ストフに入れて十五分時間も過ぎた頃脂肪を掛け、又いれて程過たる頃油を掛け、肉の上下と程能く色を付けて燒き、火が通ッたと思はば肉を取り皿の油を絞り、燒肉汁少々に鹽を加へて沸騰させ、肉を薄く切りて皿に取り、汁をかけて食るのです。

總て蒸燒鳥をなす時間は、皆一定の時間ありますけれども、同じ鳥にも大小あり、火加減強弱とも適度あります、委しくは實物を以て敎示しませう。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

三十　鳥ハ蒸やき野菜と煮る心得。　鶏、家鴨、雉子、鴨の類蒸焼になしたのを、骨付の儘大小好き程に切り、大根人参芋の類を充分柔らかく煮、甘味と醤油で鹽梅をなし、鳥、葱を加へて一煮なして食るのです。（但し胡椒を振べし）。或は筍、牛房、燒豆腐を鳥と煮るには、筍を能く湯煎なし、牛房と味淋煮出しにて七分通りも煮えた頃醤油を加へ、豆腐と鳥を入るのです。　尚又鳥を骨付のまゝ壹寸程に切りて細く裂き、ぜんまい、さき干大根、切干大根、さや隠元、豌豆の類を煮出しに、甘味少々加へたのにて、八分通も煮た頃鳥を入れるのです。　鳥は生で切り野菜物と煮るより蒸やきになす時は第一風味宜敷して早く煮ゑます。　此外取合献立種々ありますけれども、餘は之にならひ見計ひて調理するのです。

衛生三食見立て　一名保健食料

岩間芳松

○第四日分

朝食。　椀…生ゆば落し玉子三ッ◎口からし胡椒の内◎飯（一合三夕）

晝食。　皿…鮃西洋揚（四十匁）◎椀…鶏卵豆腐（貳ッ）青み入、口卯生姜◎飯（一合貳夕）

夕食。　皿…豚肉煮込（十八匁）付合、人参、馬鈴薯◎小皿ほうれん草（十五匁）胡麻仕立◎飯（壹合四夕）

文藝美術

歳暮の文

竹屋雅子

たちまちかはりゆく世のならひに言へるあすか川の水よりもいとゞく流れつゝとまらぬ月日にて數ふればことしもはやのこり少なくなりにけり。學びはてん、よみはてんと思ひしふみどもゝみな半ばにて、何事をしつゝこのひとゝせを過ごしにけんと今更わぶともかひなきわざなれば、こんとしこそは心してつとめ學ばゞやと思ふ折しも、となりにて幼き聲して今年まなばずとも來んとしありといふ事なかれと朱文公とかいへる唐人のふみとよみいでたるをりに逢ひて、いとやさしうおぼゑければ、

としことに又こむとしと頼みつゝ空しく年をつみにける哉

五社百詠（其三）卅六號つゞき

俊成卿

○春雨

春雨は綠のそらをうつしもて野邊の色をも染るなりけり。

草も木もあまねくめぐむ春雨に袖いぬれてもかひなかりけり

春雨はくる人もなく跡たえぬ、柳の門の軒の糸水。

春雨は軒の糸水つくゞゝと心ぼそくて日をもふるかな。

つくゞゝとぬれそふ〇〇〇ふるともみねて春雨ぞふる。

右第三の歌は玉葉集に、第四の歌は風雅集にもあります。

○春駒

小笠原やけの丶薄つのぐめは、すゞろにまがふかひの黒駒。

若草をつまとや駒は思ふらん野をなつかしみはなれざりけり

故鄉のみかきの原の放れ駒さころのかはめあれてみゆらん。

はむ駒のあしきにのみもみゆる哉難波の春や深く成らん。

とりつなけはなにもはてじ春駒のあるゝは草になつく也けり

○歸雁

秋はきてはるは常世にかへる雁夏やにゝしき住家なるなん。

歸かり聲に涙やたくふらんながむる袖に露のおちそふ。

何となく思ひをおくるかへる雁ひと傳やらん人はなけれども。

春か空こと他にみえてかへる雁松のかせにぞ聲かよふなる。

秋きてもなるとはなしに歸る雁春ろ別の心こそすれ。

○喚子鳥

哀とはよるの鶴をそ思ひしきよその山にもよぶこ鳥鳴。

人の〇ろた丶すの松のよふこ鳥心のやみはそらにしるらん。

老の身をいとはぬ人はかた山にめつらしく鳴よふこ鳥哉。

思ふ事いはせの森のよぶこ鳥あはれしるらん人のきけかし。

哀なる春の山路のよふこ鳥花のかきにぞ人とまれとや。

○苗代

くもつ河せきれてまける苗代は秋の空こそかねてみえけれ。

頼もしなみたらし河を堰掛て御注連はへたるみとしろの種。

注連はふる苗代がきのけしきにて田回のたねそしらるゝ。

しつかせく苗代水のながれまで難波わたりは心有けり。

花の散山河せける苗代にしづか心もみつへかりける。

○菫

みくまの丶濱ゆふかけにさく菫かさねて色のむつましき哉。

紫の野邊のしばふのつぼすみれかへさの道もむつましき哉。

伊にしへのまかきの丶らのつぼすみれ昔戀てや露けかるらん

すみれ草遠さと小の丶朝露にぬるともつまん旅のかたみに。

すみれさく淺茅か原をふみ分てとふ人なきもさもあらはあれ

○杜若

こなきつむあかたのゐとの杜若花の色にそへたてさりけれ。

神山やおほたの澤の杜若ふかき頼みは色にみゆらん。

むらさきの色はふかきを杜若淺澤小野にいかて咲らん。

こやの池の汀にうつる杜若あしのかてひをまはらなりとや。

春深きぬま江の水の岩かきに猶かきこむる杜若哉。

○藤

哀ともうしともおもふ藤花などかし枝に我れをなしけん。
藤の花雲にまかひて散下に雨そぼふける夕暮の空。
藤の花うちの諸人みし時も雲の衣をつらねしをはや。
住の江の松に藤こそ咲にけれ梢にかゝるむらさきのなみ。
しかの山松にかゝれる藤の花浦のさゝ波こすかとぞみる。

○款冬

昔たれうゑはじめてか山ふきの名をながしけんゐでの玉河。
櫻散春のくれ行物おもひに忘られぬべき山吹の花。
駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井での玉川。
行春といづかたへともいはじとや口なしに咲山ふきの花。
山ふきの名をは冬こそ聞しかと春の夕の風にこそさけ。

第八回懸賞文藝應募唱歌追加（卅六號つゞき）

題　歳暮

取捨標準　第一意匠の新奇○第二調及び修辭○此二件を備へたものを一等とする事

浪風あらき世のなだを　のる舟人はこゝろせよ。
年のせとぎは今さらに　楫とりよきか、帆は直か。
いざとく／＼かへらまし。　共に新玉のとしを迎へん。
たのしわれ學びもをへ、　年くれぬ。ふるさとに
うれしわれわざなしはて、　年くれぬ。ふるさとに
いざとく／＼歸らまし。　さぞやわきもこ見かゐるらめ
手に手たづさへてのべに語らん。

水鳥の聲も身にしむ雪の夜に人ゐさわがし、年のくれ。
窓はとざせど早咲きの　梅のかをりに春ぞ來にける。

右評　最初のが一等です。　が、期日に後れた作ゆゑ兎に角審査以外とします。　右…櫻亭主人（ミノ）

○文章

あら歳暮！　何んと好い語ではありませぬか？　一年に二度とない此歳暮を云ふ語は小さい小兒の愛らしい胸は只此語の響を聞ても早小波を立る歳暮と口で言へば唯一言。けれど內に呼吸して居る無量の情は汲めども容易に盡きますまい。一夜の界に天地の萬象を變移するは暦の開閉に及ぶ者もない。寒威烈しく未だ見ぬ草薙の劒の樣な鋭い風が木々の頭を薙て行く溢した水は忽に白く凝り破障子は寒風に鳴り彼所はいかにと仰き見る山の峯何時の程に年老てか白き頭の衰へ勝に聳て居ます中にも年を送るをいそぐのか肉を臂き骨を刺す樣な雪を交た北風に鼻は剔られ頰はけづられ眼は氷り唇は縦みます人の世の果敢なさを悟れとの示しにや雪も降ては晴れ晴れてはふり次第に積てザッと降り來るかと思へば愈白くザッと晴れて月光させば益きらめきて日一日より野も山も……銀世界目の届ぬ迄人は心氣を一掃し新悅最早感しないばかり街路騷しく裏家には歳暮の蹡蹌盛に杵音に勞て居ます室に入るも寒多く雲は天に凝り雁は雪に交て飛び林園は陰なく松柏益〱翠に滿つ池河鏡の看魚は氷を擔て隱れ人畜は寒を憚て山里蹤を絕ました嗚呼！引き止めても止かぬるは梓弓——何しても暮年留め難く明年來り易い思へば何時の間にか閑けき看花の春日は蒸す如き夏日となり橋檻涼を迎ふる日暮の天は早くも虫聲の園ち誠に哀な秋色に變し菊花の幽姿紅葉の艷容も何れの間にか散り果てゝ寂しき冬の景色となりました——風で雲を拂ひけん研きたる如き月影は松の木の間に照渡て梟の聲最疎く雲で風を誘ひたるにや輝く月は俄に呑れ颯と一雪忩と打つ來る落つけず又吹き捲て梢の上美人ありてのかハデな模樣付の手拭の雲で月の玉顏を時々掩て倏にして亮　忽にして暗——年も末野に咲送る山の木枯音凄く降らぬも雪と疑れます是が明治廿二年の最後の景色否本年のみならず年々變化なき造化の巧妙なる活劇です嗚呼思ひは悲し・老の鄕……地軸の轉ずる每に盛年の老鄕は近づき來る而して近付來るかと思ふ每に悲が胸一杯閉込て來る矢よりも早い光陰は只一轉瞬の間に見る〱通過して早老鄕に近付きくる頰を嘗めゆく肌寒い風其は老鄕よりふく風目に入る向の白い雪其は老鄕の山の得色を顯た雪我々も夢の中に頭が雪を戴き——顏が風なくして波よするしわかと思は不思議。奇妙。私は獨寒燈明…滅の下に坐し頗無聊机上は手を擧て突居してわッたが益不思議。遠く聞るは陶淵明が悲そうに吟る聲…盛年不重來一日再難晨及時應勉勵歳月不待人此を聞と私が眼は早涙です已にして一層焦

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

思せしむる音……新日本を相續して日丸國旗を永遠に輝さなくてなりません貿易を頻繁にし殖産興業を盛にし工藝を益發達し新日本の文明を益消化し新日本の富强を謀らなくてはなりません最後の一聲一層勢を入れ叱呼して新日本の强弱盛衰は一に現時婦女子の精神如何と勤と不勤とにありますと未だ終らざるに文子傍らより呌きて尺の璧を貴ばず寸陰を貴べと聞き終て夢中です立志成功を期し鵬翼未だ仲びざるに悠々貴重なる一刻千金の好時期を空過し月日の流るゝと思へば愈悲い！筆も語も及ばず？なれど心おくらすに及ばない撓まず屈せず勉て後に思ふ事出來るものですヨシ／＼精神一到何事不成……後悔先に立ず已往咎めず明治よりは粉骨摧身して一層勉強なさい現盛年を過ぎては何事も出來ません！翠を欺く鬢の艶花に嫉る顔月に妬る眉珠の眼文鳥嘴の鼻雪の肌是は美人の嫋娜姿霜ふる髮を戴て額に波よするしわ腰はくの字か梓弓か骨と皮との冬樹立是ぞ美人の老姿翠の髮は霜を置き三日月の眉は昔戀しき面影是は憐れ美人の末路否月日の世に生れた人は誰しも年を重る曉……皆此姿は免れぬ——因果？仇？

山も老たる風情也暮の雪

右評　字句がまだ調ひません　　右…本内忠治

歲暮其物の勢力は何故此樣に强いでしやう　世間の人渾て皆其爲に心を動します　御覽　いぶせき賤が伏屋の人　米屋の拂ひ薪代の滯り　それを濟す爲に　心を千々に碎て居るでしやう　それに親の心を知らぬ幼兒共　凧よ毬よと今から年の始の遊を樂んで居るでしやう　又去歲の今宵同士打語らふて酌つ謡つ夜を明したが　これに其人其友　今は半ば千里の客半ば九泉の人になッたとて　靑燈の下　思はず溢す一雫　竊に悲哀の袖を絞る人も有でしやう　此兒が出來た　今年は賑しいとて　梅綻びた窓の邊り　互に顔打見合して嬉しく笑ふ人も有でしやう　世は樣々　人も心の亦樣々　異る情の起るのも至當です　吾身も今は歲暮の勢力に迫られ端なくも昔を思ひ出しました　恰度今より前八…九年―明治十五年の春の末つ頃　野面山邊の若綠　燃立一時の遊學の念に任せて　父と兄とに「サラバ身ヲ大切ニセヨ」「サラバ勉强セヨ」との戒を受て　此地へ來ました　このかた　雲間に呌ぶ雁の音に霜野に咽ぶ虫の聲に　幾夜戀しい故都の夢を醒しました　其時の心　此も修業の一と思ひ直して　果敢ない涙を乾て來て遂に又今日　嗚呼月日は早いもの　少年は老易もの　學業は實に遂難いもの　學で來た事は何程？經て來た事は何程？百

事蹉跎思黯然　錦衣何日向郷天　寒波撼岸茅渟浦　也在愁中送一年　此詩は我身が二年前に作ッた述懐ですが今年も少しも代つた所がありません　思へば念へばあゝ吾身の七情は擧つて動きます

右…藤　元　朝（ヒサカ）

右一部進呈

暮てまた明くとのみこそ思ひしが今年はけふぞかぎり成ける

アヽ今年も愈今宵きり　年の始に堅く誓ておいた學の業も負債となつて立きれぬ程アヽどうしやうなど机によつて案じ煩ふうち　思はずも現ろみました人柴の戸を叩く人　誰でしやう豫て姉とも頼む　文子の聲です　隔ぬ中とて　遠慮のなく　机の向に座を搆へましたが　いつにない　不機嫌　不審さに　暫し其面色を見詰てゐましたヤゝありてするどい　聲で「けふは幾日ですか」の一言は迅雷耳を覆ふの暇もない程の有様　胸に釘打るゝ苦しさ　何と言解言葉もありませんたゞそびらに冷汗がビッショリ　傍から下女の梅にモゥれ嬢さんと大きナ聲をかけられ　アヽ今のは夢人心！けにざまく。すゝはらふ聲や餅つく音を聞きて樂む稚な子――また一つ重ぬる歳。正月のかるたあそびを、指かゞめつゝ待遠さうな顔。一日千秋の思いで。あゝ羨ましい稚な子！　死出の旅路の一里塚、こしてまだまもなう今ハはやまたの塚を望みます。あゝ浮世！一年の月日、眞に早いもの――夢の間？否……人生もまた夢。無常の風、將に吹消さんと催しつるこの身。一年ハ夢の間……その五十年、げに幻の間にすぎます。あゝ悲い老の身！　稚な子。老の身、ろの心――れなじ歳の暮故感情もさまぐに浮びます。が何れも同じ人の上の身。あの稚な子　いまに弓なす腰、霜れくかしら人生無常……夢、あゝ見るやうです。あの老の身、姉に抱かせ、ろして裝ひし笑顔、慈母の懐に指―紅葉のやうな―折りつゝ、元日をたづね、答を得て、そして漸くに凹めし笑くぼ、あゝ見るやうです。　けふの花……あすの泥。人生……流水――再び掬ひ得るは、はや前の水でありません。あら無常―歳の暮の感情、喜びでせうか――はた憂？

右…撫　箏　女　史（ミツ）

旅衣　霜に雪に幾日襲ねて　又これ茲に一年　あゝ堂には待つ白髪の老親　その慈愛の笑顔　唯はかない孤燈の夢に見る計り　倘着替へ能はぬ錦に胸の思ひは徒らに日より先だつて年の末　名殘惜しとは誰が言葉か　俤に離れぬあの青山の庵に歸つて滲漉闕け定省違ふた其罪を詫ひらることの出來る時待つ身には　あゝ早く流れて　水といふ日　疾く行けよ駒といふ日思のとゞくときまで

右…三　坂　き　ぬ（ヒサカ）

日や月や寒や暖や倏忽として互に來たかと思へは又も互に退きます――實に光陰は流水の如く正月と思ひし中に早や十二月の下旬――一年位は夢の樣です――思出てや彌生の半親しき友と母に供なわれて最寄の山へ花見に行き又文月中旬ある日の夕暮妹と共に近き川邊に出て螢のとりくらべなどして樂しんだのも昨日かと思へし中に今日は早や歲の暮――二三日後迄――綠を飾りし山々も今日は早や冬木立――高き峯――深き谷――積りし雪は壹面の銀世界――處々にたなびく霞未だ晴れもやらす――誠に絶佳の景――書に書きたる樣です――向の山ぎはには若き男子等か早や飾り松の用意と見えて繩と鎌を携ひ二三人連れにて何か語らひつゝ山の方へと行きます――又此方の霞の中からかすかに見ゆる人々はさきがけの人と見えて小松を切りて脊負もあれはかつぐもありて村の方を差してかへりきます――種々さまぐの事に暫し見蕩れていたりしか短き冬の日とて早やくれかゝります――妾とてもかくては居られじと縫かけし着物をたゝみあたりを取りかた付て居りし處此次の間から妹か嬉し聲にて姉さん只今お歲暮の御祝に一句作りましたからなほしてくださいと携さへきし短冊を妾の前へ出しました手に取りて見れば中程に霞の附いた幅廣の丹冊に「かぞへ日をゆきまのしものひかりかな」――嗚呼美事に出來ました手跡と云ひ句と云ひ實に申樣のない上出來直す處ではない――妾かお前に――アヲいやですよ姉さんは人を譏て――いえそしるのでは有りません――見れば見る程おもしろい句――丁度此度いらつめに記載して有る懸賞文藝の題は「歲暮」――實にあの歲暮の題には餘程かなつて居るけれどをしい事には俳句と和歌か拔て居ります――でも殘念な事俳句がはいつて居れは「此句か優等」――けれとも俳句が拔ておるのか殘念――かんじて見れば見る程題にかなつた句――誠に能く出來ましたと賞して妹に渡せば妹が喜んてそれて父上樣に御目に懸ると言て奧なる父の居間へと出て行ました――日は益々暮れかゝる今の短冊のお陰ておほきに隙とれしと獨言きながらあたりを掃きよめ――然らば是より厨に行て母上の仕事の手傳ひいたさばやと居間を立て次の間へ出て見ればいつの間にか早や松飾りか出來て居りました下男の注意と見へて角先から神棚に至る迄餘程美事――又床の間には父君の御手際と見へてきれいに梅の枝か挿てあります――角先の往來を通行する人々はなんとなくもの忙かしそうに足早やに行きすぎます――今來は家內一同無事にて目出度

事――母の居間へ行きて見れば萬事仕事のまにあひしにや窓下に歳暮の御祝ひ物の用意と見いて水引や熨斗包紙など出て居ります――母様妾も手傳ましやうと言いながら母と共に祝物を包て居りし處へ妹が父君と共に入りきました――姉さん先程の歌が能く出來ましたと父さんもおつしやりました――さうして御褒美によい者を戴たきましたと笑ながら袂から取り出したる品は本舶來のごむ球り――いろ〳〵の色と以て美事に出來てあります――まあ能い事うらやましいね―妹―姉さん此度はあなたの番てすよ――唱歌でも和歌ても今様ても何んてもよろしう御座いますから是非に何か一つ作てくださいと妹か父と共にのたまへば――妾も好める道とてかたへに有し硯引寄せそれては――矢張お前の様に歳暮を題にして作りますよ――屢し考かへて居しが早やむねに浮びしと見へて走り書にかきくたしたのは和歌――

「なるならば暮ゆく年をとめおきてくる正月をみせてやりたや」。

右…柳原みどり（ノナ）

月日たつのは矢よりも疾しとは何んで云ふのでしやう……待ち焦れたお鏡搗きの來た嬉しさ煤篩も濟みいよ〳〵七五三張となり神棚の振やかなる飾美しき門松の勢ひ能く立たるを見た時は眞に手足の振舞も知れませなんだ叱かられるかと思へども遂ひ思はず知らず母にモウ幾ッ寝たられ正月かと問ひましたら亦お尋ねかモウ五日……母の答を聞きました時アヽまだ五日何故正月は早く來ません？と云ふて傍の人に笑ハれ晴れ着を仕立てると思へば常に増して母が戀はしくて晴れ着を見れば猶更一刻千秋の思ひ！銚子の飾をしながら秀や明日は正月ぢやと父が云ひしときは何の位嬉しくあつたやら之ぞ世に云ふ嬉ひ事の極でしやう……何時迄も斯様な心であつたなら年の老るもすコッ悲むまいに今年の早くたつたと！丸で夢の中に過ぎし心地すれど考へ見れば二月の初より風の神に誘はれて床籠りも次第に募りて櫻の花と諸共に散り果つべしと思ひしに慈悲ある親の介抱と神の助に救ハれて捨てし命を拾ひしは春の日ならで永く忘れじと熱き夏をも過ぎ去りて燈火嗜む秋の頃より再び書物を繙かば心外に堪ざることの多かりし中にも「少年易老學難成一寸光陰不可輕」――若病に罹されば一年のあたら月日を捨ざらましと思へば殘念！往來る人も急がしき摸様にて話す言葉も落つかず催鬼に追るヽ歳の暮夜に日を繼もけふとあす嗚呼辛氣辛苦の歳の暮！一夜明なばまた一年志しだに撓ゆまずば歳は代るも――遂げ得ん

右…水野秀（木ナカ）

右三等賞いらつめ三部進呈

誠にうら寒き日和、日影さへ力の無さゝうな空の。夜に入れば、殊更寂しさうです。 九日の月清く冴えて、庵を廻る小川へ寫ろふけはい。 澄み切ッた流れは丁度鏡の樣、霜と相加して肌をかす夕風、冷き利どき、丁度身を切る斗り。思へば月とかくす雲さへなきに六ッの花チラ〳〵、いたわしいのは庭の山茶花です、漸々二三日前に咲いた笑顔、容敷もなう打なやませます。 が此の雪、今山茶花のためには、にくき樣の、考へれば可愛らしい雪、これこそ、他の凡てのものに似もよらず、 誠今年の名殘として、 樂しい嬉しい喜ばしい來る新春を迎へるのです。

兼てよりくべきものとは知りながら
さてもかなしきとしのくれかな

右いらつめ四部進呈　琴水女史（[illegible]）

〇懸賞文藝新題

〇第九回題（和歌唱歌詩淨瑠璃及び文章に限る）

右　かるた遊び。　十二月廿五日〆切

〇第十回題（何でもよし）

右　美人雪夜に行む。　一月十日〆切

〇第十一回題（何でもよし）

右　難破船の鬪題　一月二十日〆切

〇第十二回題（何でもよし）

右　處女の愛情　二月十日〆切

〇第十三回題（唱歌淨瑠璃及び文章に限る）

右　桃花　二月二十日〆切

右文藝應募者心得

第一　題を種にして成るべく趣向を立てるのを尙ぶ事〇第二　唱歌淨瑠璃及び文章は各一千五百字以內の事〇第三　一人で二種類の作を投せられる人は二種類別々の紙に書く事〇第四　原稿には宿所姓名明記の事〇第五　原稿は半紙に限る事〇第六　第二第三第四及び第五に背くものは沒書。　賞品は一等賞清親良信二氏の內御好みの**肉筆着色絹**地書
書家の子に成つた書帖だけの大さの
一面〇二等いらつめ十二部〇三等三部。

雜纂

饗庭篁村氏ふたゝび筆を新聞社に執る

われ〳〵が篁村氏の隱遁と題していらつめへ出したのは二三號前の事、その墨もまだ乾かぬ間更に篁村氏は朝日新聞社に入られたとの報に接しました。前後變化の定まらぬ、われ〳〵は唯驚くばかりです。其間いづれ委細の事も有ることでしやう。説を作して解釋するものが有りますが、それをも一概には信ぜられますまい。唯此場にあたつて一言する事も有ります。われ〳〵が篁村氏の隱遁に關しての望みは既に前々の號に出したとほりです。その吾々の望みが既に違つた以上はまた吾々は飽くまでも篁村氏がたとひ切りに筆を執られるにしろ、充分に持重されるのを祈る即ち是です。

日本文學史に小説を省く

また實物を見ぬことゆゑよくは分かりませんが、三上參次氏等が編纂される日本文學史中には小説の一科をとさらに省かれたとの事です。吾々の聞いたのは唯是だけですが、併し此説だけで推察をめぐらせば、小説とは恐らくは德川小説の事では有りませんか。源氏とて榮花とて其他その時代の諸作に小説と命じて恥かしくないものも有つた、それを捨てられるとの事では眞逆有りますまい。と言つて德川小説なら譯も無く捨てゝいゝかと言ふに、よしや其時代では小説として尊はれて取り扱はれなかつたにしろ、また捨てゝいゝと斷言する事も出來ますまい。報を受けた處の説がまだ明かで無い故われ〳〵にも思ふ處と言ひつくせませんが、いづれ何か子細の有る事でしやう。

國民の友の新年附錄

第一の森鷗外氏の小説、これは珍らしい新著との事、次の紅葉子の小説、これは毎もの通り嘸練りに練られたこと、須藤氏の小説、これも眞逆に書き流しのものでも無さゝう、終りの美妙子の長歌、これもまた喧ましい論が出さうな物、兎に角夏期附錄よりは又かはつた處が有りさうです。思ひ出せば昨年は蝴蝶と細君とて終に一年間浪を起した、ことしはそも〳〵どうでしやう。この文學の舞臺開きにわれ〳〵は充分望みを屬します。

喪服の色

一般に黒が喪服の色ですが、其外の色も國により喪服に染めます。 さうす しい あいらんど人は黒と白、えしおぴあ人は鳶色鼠、ぺるしやは淡鳶色、しりあ、かぱどしあ、あるめにあ人は空色、ぼッから人は濃い藍、とるこ人は紫、支那人は白を着けます。 白は喪服に用ゐた事が多く、日本では昔は白、へぬり八世もあんね ぶうりん妃の崩御の時に白を着ました。 むかしの羅馬とすぱるたとの貴婦人も白を用ゐ、またすぺいんでは一千四百九十八年まで白を用ゐましたあらごんのかざりんが薨じた時にあんね ぶうりんは黄を用ゐました。 ふらんすでは僭正と王とのためには紫の喪服をつけました。

帽子を去る禮

西洋で帽子を去ッて禮をする風習はシバリイ時代に出來ました。 ナイドが公會で物具をゆるめて打ち解ける場合ひには其禮として冑を脱ぎました。 日本の昔の宴席に武士が大刀を去ッたのと同じ風習です。 この風が終に後まで傳はッて今日にも殘ッて、帽子を去るのが敬禮となりました。 日本ではいつ頃から始まッたか、まだ調べもしませんが一寸わかりません。 しかし古い事に違ひ無いといふ事は源平時代でも武士が禮の時には全く兜を外して居ました。 武家が高貴の人にでも面會する時には必らず兜をぬいで高紐にかけました。 要するにかぶり物を去る禮はこの頃から矢張り始まッたのでしやう。 其以前の公卿裝束の冠りはまず兜と同じ性質のものでは有りますが、矢たらに左樣取るものでも有りませんでした。

ちやアれす二世の滑稽

英國のちやアれす二世はよほど滑稽な人と見えて近刊の外國雜誌にその奇談が載せてありました。 墓の碑文が出來たのを侍從が御目にかけると帝は讀み下しました。 其文句。

「こゝに わが 君 いませり。
君、その 語を 人 信せぬ。
君、更に 愚言と 吐かぬ、
君、更に 又 智言を 言はぬ——

讀みとはッて王は言ひました、「本當だ、それに違ひない。私の言葉は私のだが、私の擧動はみんな家來どものだもの」。

廢娼論

かれこれ道徳論に關した清淨の説が此頃のやうに湧いて來るのも、思へば雨降つて地固まるといふたとへと同じ事、女學校事件や賄賂さわぎや何かゞ間接に之を奬勵したので、まづ祝ふべき事です。或る一部の人が廢娼に關して熱心なのは如何にも敬服しまそ。熱心の餘、小數の言ふ説をして俄に無理往生に多數の反對者を厭制しやうといふのは些しく過ぎた事です。廢娼の美は言ふ迄も有りません。廢娼にしたがつて起る私通などに對して今日の婦人に充分の覺悟が有りましやうか、どうでしやう。それと先づ固めぬのは手の落ちた處です。更に今一歩すゝめて望めば、もすこし何よりも宗教に篤い心を廣く起させること、世にこれが又第一の手段です。廢娼に對して吾々も異論は素より有りません。唯ろの以後即ち將來の事がどう辨護されても氣になります。

或人の辭世

誰か知りませんが、むかし或る人が左のやうな辭世を書きました。

「この世に客に來たと思へば悲くもなし。心にかなふ食物に向ふ時はいたゞいて食ふべし。心に叶はぬ食物に向ふ時も客の身なれば食はねばならず。孫子兄弟によろしく挨拶をいたし、心のこさず歸るがよし。『父母によばれて、かりに客にきてこゝろ殘さずかへるふるさと』。人をそろへ、武具とかくまじと思へば、儉約を守るべし。儉約とは我身の不自由するを、堪忍するにあり。これ足るを知るべし」。

露伴子の(毒朱唇)

露伴子は曾て大詩人といふものを出版しさうにして思ひかへて止めましたが、更に作り直して毒朱唇と題し、來年の都の花へ出す事になりました。大詩人と言つた時は中に婦人と男子が寢ながら釋迦を品評するとの物語りが有つたとのこと。今(毒朱唇)には其段だけ拔きましたが、趣意は大抵同じこと。何にしろ奇な趣向です。

佛國のどうで氏

今日佛國で、否、ほとんど歐米に小説世界の兩覇王とも言ふべきはえみる ぞら氏とあるふォんす どうで氏(魯國の

とるすとい氏をば除き）この二人で、これらの二氏へ諸方から頼む草稿の申し込みは隨分の事です。　今度米國のはアばアす雜誌でも中原の鹿を射落としてどうで氏の承諾を得て其新作を買ひ受けましたので、新年から出すとて諸方へ廣告しました。　佛と米とは二三千里もへだゝッた處、それでこれらの往復が有ります。　其文學界に立つものもまたそれだけの苦心と勉强とはあることです。　それを見た目で、日本の文學世界をかへりみれば…………

新流行の頭巾

如何に奇なものが流行を起すとは言へ、この頃出來たやうな頭巾が果たして終に流行するものでしやうか。　今までの無地にかはッて、織り小紋のもつとも細かい形の最も薄手なのでおこそ頭巾をこしらへて被る風が一つ起りました。　何かあまりめづらし過ぎたやうな心持ちがする頭巾ですが、いらつめ方は何とおぼしめす事でしやう。

初春のわろび

藤の舎ゆかり

樂みなお正月も、もう直に參りますから今から、申上て置ませう、初春の遊といへばまづ、骨牌、追羽子、又は手鞠で、其中尤も人の好くのは、トランプと歌哥留多で御座ませう、わけて淑女同志のお招ぎ合ひには、かるた會と定つて居る位です、なる程かるたの遊びは面白く、且つ手輕で、其で張合のある事ですから、自然遊びも活潑になつて、始て同坐した人とも早く打解けると云ふ、便にもなり升、が、其の代り隨分殺風景で優美とも思はれません……どころか是を盛んに面白く仕樣と氣を入ますと、今朝つや〳〵かに結上た髪もほつれ、きつぱりと重ねた裙も着くづれて、始の姿はなく、其計りか手にはあちこち曳抓れ創を受て其でも勝さへすれば好と痛さも忘れて、立さわぐなどは餘り結構な事とも思はれません。そこで私が、淑女方に、おすゝめ申度のは香茶音曲のお遊で御座います、其中香茶はまことに静な娯みで御座いますから初春には至極よいと存ます、まづ茶坐敷のうちを清め器物に塵一つ止ず、床には古書の細軸を掛け、花いけには紅梅か何かあつさりとたし、福壽草の愛らしい鉢うゑ一つすゑ、庭の打水もしめやかに、釜の湯のたぎる音と香のかほるばかりなどは、前の歌留多の一坐とくらべて何れ程ちがひませう、かういふ家の主を友として、御年始にいつた時の心のどけさは……ホンニいつ迄も忘られるものではありません、其から又音曲、是も亦同じ事です、清樂や三曲の合奏、實に何ともいへない優美なものです、しかし茶の道や清樂などは最も靜な程を望ますもので、迚もお酒の席や浮いた時のわざではありません、其ゆゑ、いらつめ方のお樂みしかも初春のお遊かと存ます、春といふものは自然心が陽氣になるものですから、わざ〳〵陽氣な事を求なくとも能のです、靜におとなしく優美に高尙に樂んでガタリともさせないでも、其で別段かなしくもあれにもならないのれ、春の日です、高尙優美を愛するいらつめ方は、自分と陽氣がらせずに、陽氣な春の景色を、靜に味て下さる事を願ます、かう申たとて、私は香茶音曲のうけに入つたのではありません、かるた遊もう御面う御坐います追羽子もよく致しますが、此頃は御同樣にあまり學事がいそがしいので、つひ優美だの風流だのといふ女子に必要な思想が乏しくなつてゆくやうに存られますから、淑女方初春のお遊中丈もと存て一風かわつた申草ながら一寸申て見ました、みす〳〵陰氣な性質とお笑ひなすつて下さいますな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

答書

第三十五號疑問の答へ

問(一)太陰暦の明治二年五月廿五日は太陽暦の幾日に相當しますか　北陸山童

答　明治二年六月廿三日に相當し升……増野房人

問(二)陰暦を陽暦に直す法　北陸山童

答　陰陽兩暦對照表といふ小冊がありますそれでよく分かります。　増野房人

通信問答

心得第一　通信問答は無手數の事○第二御問ひ合せの事が答へを載せた雜誌の八號前にあればそれには委しく答へず只其處在を言ひます○第三特に普通に有益と認めた問ひにハ廣く答案を募ります○第四御問ひ合せの文字並びに文章は明亮に書くべき事

神崎ゑい子さまへ(一)二葉亭氏の本名は長谷川辰之助、さがのや氏のは矢崎鎮四郎、美妙齋氏の年齢は廿二歳、紅葉山人のは廿三歳(二)天刑病筋の人の類はすこーてらくく光るものです(三)婦人の名の下に子の字を付けるのハ藤原時代からの事で大した譯のある事でもありません。

不如子さまへ(一)牛乳ハ焚立の飯へかけて食べてもよろしいです(二)牛乳を味噌汁に混じて用ゐても害はありません(三)牛乳は煑て飲む方が無駄の水分が少なくなります(四)アルコールの强くない酒、即ちビール葡萄酒のやうなものなら食前に一オンス位飲んで大によろしーいです(四)硼砂を解かすには水へ入れて沸立たせるが宜しーいです(五)硼砂の細粉を通常の齒みがきのやうに用ゐるよりは硼砂をとかしそれで歯をみがく方が宜しーいです。硼砂水も久しく置けばヲリが溜り、そして其チリが腐敗します。

山田けん子さまへ　ニキビはハンドコロンをぬれば去ります。

片桐さまへ(一)腫物の痕を去る法は第三十三號に出て居ました(二)ソバカスを去る法はいらつめ第廿九號にありました(三)麥酒の腐敗をふせぐ法は知りません(四)齒をよく出す法はもとく口や顎の構造より齒が色々に出るものですから一概よ之と言へません。

疑問(一)最上の水彩畵手本の名。(二)同じく鉛筆畵手本の名…吉益春枝。(三)無限日曜表製作法…中山さき子。(四)遠州納豆製法…無教育娘貴答最初四題は來一月八日限り〆切確答の方へはいらつめ一部進呈の事。

廣告

注意　いらつめ第廿四號に處方を出したハンドコロン、及び第廿八號に製法を載せたポマドンヌール共近頃麁惡な剤料を以て僞造品を賣る者が有ります。翁屋へ托して弊社で發賣させる上は一々剤料を吟味しますが、麁惡な剤料で名を冒して發賣されるに於ては其効驗の無いのは勿論の事、啻に弊社の迷惑のみか又御求めの各位の御損です。東京でハ直接に翁屋から御求めになる便も有りますが、地方でハそれも叶はず、陰ながら御迷惑御察し申します。因ッて今度から手數ながら弊社で地方の各位に右兩化粧品賣買の御紹介を致します。御用の御方は弊社又は翁屋へ向けて直接に御申込下さい。其場合ひに於ては弊社で包の紙に保證の捺印をして差し立てます。御申し込は定價を添へるに限ります(郵券代用御斷)。定價ハンドコロン一瓶七十五錢、ポマドンヌール廿五錢、遞送料其他御注文の心得はいらつめ第廿九號の廣告にあります　成美社發送掛

いらつめ

合本　十一 十二 兩月分

豫告の通り合本が出來ましたから來十二月一日より發賣します●其体裁等の如何はど**優美秀麗**か一本を御求の上御品評を願ひます●紙數百廿ページ●定價十五錢五厘府外郵稅二錢●廿八號から卅三號まで殘らず合本　成美社

いらつめ**廢本非常廉價賣捌**の處瞬く間に**品切**となりましたゆゑ**更に普通本を**廢本と同様の**廉價**で賣ります但**非常**の廉價ゆゑ**割引を爲ません**　一冊三錢郵稅各五厘●十二號廿四號皆無●前金領收の上發送　成美社

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
米國新製絨氈羅氈塵去り器械
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
堅牢無比、便利一等、切地を損せずしく秋毫の垢埃をも去る器械○貴紳の住宅に最も必要の品○一個四圓五十錢

專賣　神田區通鍋町十番地　**高木商店**

新年歲暮及びくりすます用 流行新形

名刺狀袋繪紙等
最上等石版印刷

本紙雜纂内に出した事を今度から成美社で御注文に應じます（雜纂欄參看）

一 圖案の工夫望みの人は畫案の趣意を詳細に認め圖案料三十錢を（郵劵代用は五厘切手一割増）送るべき事（名刺は例外）

二 既に圖案を定めて畫圖と印刷とをのみ托される人は圖案料送付に及ばぬ事

三 畫圖は成美社で淸親月耕良信三氏に書かしめ決して他の畫を受けぬ事

四 圖案を付けても印刷濟の上で無くては注文者の御覽に入れるのを堅く謝絶する事

五 成美社で作らせる圖は中等密畫（疎畫でも價は同樣）の事。

（一）名刺

	百枚	二百枚
一度ずり	三十錢	四十五錢
二度ずり	卅五錢	五十五錢
三度ずり	四十錢	六十五錢

もし書を加へる事ならば別に書料十錢及び圖案料十五錢を加へる事。

（二）端書板の書紙及狀袋

	百枚	二百枚
一度ずり	一圓五十錢	二圓七十錢
二度ずり	一圓六十五錢	三圓
三度ずり	一圓八十錢	三圓三十錢

もし圖案御注文ならば別に圖案料卅錢を加へ、又、書を入れなければ一組に付き五十錢引く事。

（三）端書の二倍大書紙

	百枚	二百枚
一度ずり	二圓五十錢	四圓五十錢
二度ずり	三圓	五圓五十錢
三度ずり	三圓五十錢	六圓五十錢

もし圖案御注文ならば別に圖案料卅錢を加へ、又、書を入れなければ一組に付き五十錢引く事。

○右用紙は最良洋紙で前記定價の外別に紙代請求せず、それで石版は優美精巧を究めた物、廉價は言ふ迄でも有りません

● 四度ずり以上、二百枚以上、及び前記紙幅以外は御注文の別に御相談の上定價を定めます
● 刷る御筆蹟は雁皮に記して御送りあるべき事
● 御注文の際は淸親月耕良信三氏の内御望みの畫工を御指名の事
● 御注文を受取つて後、一度ずり物は四日間、二度ずり物は六日間、三度ずり物は一週間にこしらへ上げる事
● 御注文は必ず前金の事、郵劵代用ならば五厘切手で一割増の事
● 御注文品出來の上は成美社から御屆申す事
● 御注文枚數は必らず百枚及び二百枚の中に限る事
● 字の揮毫をも御托しになる事ならば無手數料で爲ます
● 遞送料（一）は百枚以上四錢以下二錢（二）は百枚以上四錢以下二錢（三）は百枚以上六錢以下四錢

東京神田區平永町
成美社

保險紺金巾

紺金巾の製造は今日に始まつた物でも有りませんが在來の者は舶來品と比へれば雲泥も啻ならずでありました實に發念の至りです故に私方では數年此方肝膽を砕き色々と工夫しましたが終に此頃に至り外國品に優るとも決して劣らぬ品を作り出しました。第一仕上け方に就ての注意は他に類は有りません。餘計な飾りて人目をくらましそれで一時を瞞着する樣な事は一切せず唯實用をのみ旨と心掛けました。針のとじ穴も多くは皆地質をいためるのもかまはず何處こゝの論なくとぢますが是も實用上少なからぬ害となるもので、私方ては之とも避けて決して害になるやうな綴方をいたしません。色艶も左樣です口と奥との色をちがへ口ばかり美麗に見せて人を欺く奸商も世に多いそれをば私方ては最も注意して口も奥も皆平等に麗はしく致します。すべて染方といひ保方といひ幅といひ尺といひ皆注意の上に注意を加へ染色は熱湯に逢つても決してかはりませんそして價は舶來品より餘程廉下ですその他一切のことすべて外品にまさらせましたからには御用ゐになる方には此上もなき御徳用の品です即ち保險羽二重金巾と名つけた故です右紺金巾の外私方ては他の品々をも取り扱かひ別段廉價に差上げます。

一染金巾いろ／＼　一晒金巾いろ／＼
一晒天笠木綿いろ／＼　一丸唐木綿いろ／＼
また外に夏向中形るゐをも澤山製造して販賣します

明治廿二年八月一日改正

東京日本はし區富澤町
十七番地南側中ほど
小松太助

屠蘇

皆樣がた既に御存しの通り世に屠蘇の種類はいくらもあッて毎年當時節になると賣出しますが多くは皆それに用ゐる藥品に撰擇を加へません又間々その事が稍行き届いてあるも必要な佳香に乏しいです拙店で調製します延壽屠蘇散は右樣の者とは大にちがひ藥品は最良の者を用ひ又香も宜しくあります實に用ゐ盡した殘物をも捨るのが惜しい位です誠に屠蘇の屠蘇たる處でしやう江湖の諸君諸孃ぞく／＼御買求遊ばされよき春を迎へ玉はん事を願ひます

東京神田區南
神保町四番地
れきなや

樂器着荷廣告

弊店儀かねて歐米へ注文致し置き候ふヴァイオリン、オルガン、ピアノ並びに音樂書籍など各種着荷いたし候ふ間御一覽の上御購求被下度伏して是祈る

○イタリー製ヴァイオリン箱入り
右イタリー品は從來あまりこれなし獨逸製とは品位一等の差に非す今弊店に於て之を專賣す
九圓、十二圓、十六圓、廿五圓、卅圓、四十圓其他

○和製ヴァイオリン
右は弊店製造品にて和製品中唯一との評あり
四圓、四圓五十錢、六圓、七圓其他

○靜岡縣濱松樂音舍製オルガン
右は近頃諸機械を設置し凡て歐米製と殊なる無き品を製するに至れり
十八圓、二十四圓、卅三圓、三十七圓、四十五圓、六十圓、五十二圓、七十圓、九十圓、百二十圓其他

○舶來ピアノ
百五十圓より五百圓まで各種

○舶來オルガン
三十八圓より二百五十圓まで各種

○舶來ヴァイオリン附屬品、糸、ヤン、調子笛各種

○樂譜用紙

○オルガン譜用、ピアノ譜用、ヴァイオリン譜用椅子

●諸樂器類深切に御直し致し申し候
調子の義は**外人**に致させ申すべく候
破損の節は御報知次第參上委しく申し上ぐべく候

神田區通鍋町
十番地
高木樂器商店

以良都女　第三巻　明治二二年

発行者　船橋　治
発行所　不二出版株式会社
東京都文京区本郷三丁目一六番六号
電話〇三(八一二)四四三三
振替　東京六―九四〇八四

印刷所　(有)東光
製本所　青木製本所

一九八三年一月二五日／復刻版発行

©1983　乱丁落丁はお取り替えいたします

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY
3 1924 113 041 887

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY
3 1924 113 041 887

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1762
I75+
no.19-37
1889

ASIA

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY